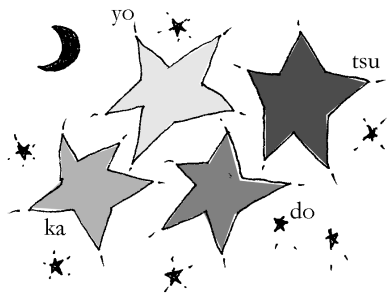


第4話 ハムエツグ定食



時計の針が一時を指した。

あと六時間半。まだまだ、これからである。

四人の女たちは、「ガソリンを入れなきゃ」と口々につぶやき、客の目を盗みながら、ビールや焼酎しょうちゆうをちびちびと口に含んだ。飲むというほどではない。一応、ぎりぎりのわきまえはあつて、飲みながら仕事をするのは御法度だと四人とも承知していた。

そうしたことを、あらたまつて取り決めたことはなかった。そもそも、四人で食堂をひらくことになったのも、なんとなくのなりゆきである。

四人とも、どこか似たような性格で、髪は短く、気性もさっぱりとして、だらだらしているのが何より嫌いだった。かといって、あまりにきつちりしているのも息苦しいから、適当に肩の力を抜いて完璧かんぺきを目指さない。

こうした性格が災いしたのか、それとも、チェ

イン店の興隆におされたのか、四人はちょうど同じころに自分が営んできた食堂をたたんで浪人の身となった。

もともと、仲のいい友達というわけではない。

四つの食堂も離れたところにあり、頻繁に情報を交換する間柄ではなかった。

ただ、いちばん年長のキサは、いちばん歳下とししたのヨリエと同じ居酒屋で働いていた時期がわずかながらある。四人の中で最も如才ないフミナは、残るもうひとりのアヤノと同じ高校の同級だった。さらに云いうと、フミナはキサの食堂で定食を食べたことがあり、アヤノとヨリエは住んでいたアパートが近くで、商店街の中華そば屋で何度か顔を合わせていた。

そんなふうには、とりわけ親しくはなかったが、顔を見れば挨拶あいさつはするし、挨拶ついでの話から、四人がそれぞれ自分の食堂を持ったこと、そして同じように苦しい経営状況に陥っていることをいつからか知っていた。

お互いの状況がわかってからは少しばかり距離

をとり、人づてに聞いた噂話うわさばなしで、ちょうど同じころに店をたたむことになったのを四人が四人とも知っていた。

「それなら、一緒に店をやったらどうかかな」

そのセリフを誰が云い出したのかは、いまもつて謎なぞである。一応、年長者のキサが云い出したことになつてゐるが、

「知らないわよ、あたし」

キサはなぜか怒つたような口調で否定した。

「じゃあ、フミナじゃない？」

ヨリエがそう云うと、小柄なフミナは顔の前で大きく手を振って、「違う違う」とハナから認めなかつた。他の二人も同じように否定し、四人は「自分が云い出したのではない」と誰もがそう思つていた。ともすれば、荒っぽい口調で云い張り、そうした否定の思いが足並を揃そろえているところが、四人の結束の固さでもあつた。

こうした具合に、四人は特にこれといつて大きな云い争いもなく、開店以来、じきに五年を迎えようとしていた。

食堂の名は〈よつかど〉という。

\*

松井<sup>まつい</sup>は〈よつかど〉を、ひそかに「特別食堂」と呼んでいた。この場合の「特別」は、こればかりは誰にも教えないとっておき中のとっておきという意味で、松井が食べに行くのは決まって夕方である。それでもそこそこ客はあり、これ以上、客が増えてしまうと、自分の口にあの美味<sup>おい</sup>しい定食が入らなくなってしまふ。それで、誰にも教えなかつた。

たとえば、午前四時を過ぎて、あてにしていた予約がキャンセルになったとき、やり場のない思いを払拭<sup>かつしょく</sup>したくて、〈よつかど〉に立ち寄ることがあつた。

今夜もそれである。

思えば、おかしな客だつた。話が進むうち、自らを探偵であるかのようにほのめかし、しかも、ただの探偵ではなく「名探偵」だというのだから、

まともに受けとっていいものか——。

しかし、もし本当に名探偵であるとしたら、松井には相談に乗ってほしいことがあった。これまでも誰にも云えなかった話を打ち明け、「探してほしいんです、そのひとを」と云ってしまおうかと思いかけていた。

ところが、まさしく四時に近づいた頃ころ合いに、はぐらかされた。予定の時間に電話はなく、それとなく彼をおろした映画館の周辺を走ってみたが影もない——。

めずらしいことではなかった。自分に思惑があったせいで、いつもより期待が募ってはいたが、何の連絡もなしに——つまり、連絡をしてこないことよって予約がキャンセルされることはたびたびある。

（仕方がない。〈よつかど〉へでも行こう）

松井はそう決めて、表示を「空車」から「回送」に変更した。

（今夜はもう店じまいだ）

誰へでもなくフロントガラスに向かってつぶや

き、得体の知れない思いが喉のどもとまでせりあがっているのを、どこか気味悪く感じていた。こういうときは、心ここにあらずになって事故を起こしかねない。

「よし」

松井は軽く頭を振ると、片時町かたときちょうの交差点にある〈よつかど〉を目指した。かろうじて運転に集中してはいたが、それでも何度か、あのひとの横顔が浮かんでは消えてゆく。

いま一度、頭を振って姿勢を正したところへ、携帯電話の呼び出し音が響いた。

\*

〈よつかど〉という名前は、そのとおりの四つ角すなわち交差点に建っていることに由来する。

しかし、物件が決まって、いざ名前を決めようとしたとき、四人はしばらく黙り込んで、

「名前なんて、どうでもいいよ」

誰かがそう云うのを待って、ようやく口をひら

いた。

「ただの〈食堂〉でいいんだけどね」

「小洒落こじゃれた名前なんかつけても、味には関係ないし」

「美味しいのがいちばん」

「そうそう」

「でも、名なしの食堂っていうのもさ」

「それはそれでね——」

「お客さんにとって、わかりやすいのがいいよ」

「じゃあさ、こことって四つ角でしょ。目印もこの交差点になるだろうから——」

「〈へよつかど〉でいいか」

それで決まりだった。こう見えて、四人とも自分の店を始めたときは店名にこだわり、「あたし、一ヶ月くらい悩んだ」とキサはわざとらしく遠い目になって苦笑した。

「わたしもそう」「だよね」「名前は大事って思ってたから」

店をたたんだ苦い経験は、四人にほどよい「あきらめ」の思いをもたらしたらしい。夕方の仕込



みの時間に、四人は厨房ちゆうぼうで準備をしながら、「あきらめ」についてよく話し合う。

「もうさ、全部どうでもよくなっちゃって」

「ああ、わかる」

話し合うといっても、いかにもにぎやかに言葉が飛び交うのではなく、あくまで包丁や菜箸さいばしを握った手もとに集中し、ときどき思い出したように話を継いでいった。

「自分の時間とか」

「ああ、それね」

「前はさ——」

「うん。オフの時間も充実させたいとかね——」

「そう思ってた」

「仕事をしっかりやれば、オフも充実するはず、とか」

「そう思ってた」

「なんないよね」

「なんない」

「オフが充実したことなんて一度もないし」

「あたしなんか、食堂の方が充実したこともなか

ったな」

「いまはどう?」

しばしの沈黙のあと、

「いまはもう、あきらめちゃったから」

「うん、あきらめたよね」

「夢とか希望とか——」

「知ってる? 江戸っ子って、あきらめることが  
身上なんだって」

「なに、しんじょうって?」

「肝心ってことかな」

「ていうか、みんな、江戸っ子なんだっけ?」

「そうよ」「わたしはそう」と四人全員が手をと  
めて大きくうなずいた。

「道理で」

「何が道理で?」

「江戸っ子って、何ひとつやり遂げられないんだ  
って」

四人は云いかけた言葉を呑み、ふたたび沈黙に  
戻って、手だけを動かした。

包丁がまな板を叩く音が際立ち、鍋の中でぐつ

ぐつと煮える音が沈黙に縁取られて大きくなった。

\*

携帯から伝わってきたのは落ち着いた女性の声だった。

「冬木ふゆきです」と、あたかも知り合いのように名乗ったが、ざっと考えて、松井には思い当たる人がいなかった。

「冬木可奈子かなこです」

「ええと——失礼ですが——」

「あ、すみません。わたし、このあいだ、びわをです——」

「ああ」と松井は「びわ」と聞いてすぐに思い出した。「びわ泥棒の——」

「はい」

二人とも、なんだかおかしくなって笑い出した。

「どうされました?」

「ええ。もし、できたら、ここまで来ていただきたいんです。でも、ここがどこなのか判わからなく

て」

「ああ」と松井は路肩に車を停めたまま、「電信柱に住所があるでしょう？」と云って、ナビの検索画面をたちあげた。

「電信柱ですか」

息を弾ませながら探しているのが電話ごしに伝わってくる。

「あ、ありました。ええとですね——」

りゆうちやう流暢に住所を読みあげる声に松井はたじろいだ  
が、(そうか、彼女はたしかオペレーターの仕事をしていたんだっけ)と少しずつ記憶がよみがえってきた。

「——の二丁目六番地です」

ナビに打ち込むまでもなく、彼女のいる住所はさほど遠くないと判った。

「いますぐ、うかがってもよろしいですか」

「ええ。そうしていただけると有難いんですが」

「かしこまりました」

松井のまさにかしこまった物云いに、冬木可奈子はくすぐったいような快さを覚えた。電話を切

るなり、「へへへ」とだらしない笑みを浮かべ、  
(かしこまりました、だって)

快さと同時に、自分が空腹であることに気がつ  
いた。いつもなら、仕事のあと、コンビニ弁当を  
食べるか深夜営業の飲食店で軽食をとる。しかし、  
今夜は予定外のこと連続し、なんだかよくわか  
らないうちに時間が過ぎていた。

(なにか、食べてから帰りたいな——)

\*

「でもさ、なにかひとつくらい、あきらめ切れな  
いものがあるんじゃない?」

「いや、あたしはないな」

四人の女たちは食堂のカウンターの中に並び、  
夕方の仕込みのときと同じように、めいめい自分  
の仕事をこなしながら口を動かした。

「なんかあるでしょう?」

「何?」

「男とかさ」

時計はすでに午前四時半をまわり、その時間はほとんど客がいなかった。店は毎日朝七時半に閉めるのだが、五時半を過ぎると、朝食目当ての近所の老人や、夜勤明けの男たち、それに夜どおし走りつづけたタクシー・ドライバーがやってくる。が、午前四時からの一時間半は至って平穩で、なかば休憩の時間でもあり、朝の客を迎え入れるための二度目の仕込み時間でもあった。

「恋とか愛とかさ」

「もう、あきらめたよね」

「あきらめた」

「もう、いいよ」

「振りまわされるだけだもん」

「だけどね」

「うんうん。云わなくてもわかってる」

「のめり込むタイプだから、あたしたち」

「そこはそうでしょ。そうじゃないと、女ひとりで食堂やろうなんて思わないよ」

「考えてみると、よくやってたよね、ひとりで」

「江戸っ子なのね」

「のめりこんじゃったよなあ」

「え？ 何？ 男についてこと？」

「そうね。こっちものめり込んだけど、向こうもさ——」

「あ、あたしはそれだな。男の方があたしに入れあげちゃって、お互い不幸になるパターン。あたしはどうしたって店に夢中なわけだから」

「わたしは男をとるか店をとるかみたいなの、そういうものすごくベタな展開になっちゃって、まあ、店をとったんだけどね、結局、つぶれちゃったわけだから、それだったら、男をとっておけばよかったなあって」

「後悔してる？」

「ううん。後悔っていうのは基本的にしないから」

「だよね。後悔って、うまくいく前提で云う言葉だけど、そんなのあり得くない？ 大体、うまくいかない方が多いんだし。あっちの道へ行ったら行ったで、何かしらうまくいかなかったと思うな。だから、後悔のしようもないし——」

「そうか。後悔って、夢や希望と同じなんだ」

「そうよ。あっちへ行ったら幸せになってた、なんて幻想なんだから」

「アヤノはどうなの？ さつきから黙ったままだけど」

「もしかして、本気で後悔してるのか」

「いや、そんなことはないけど——」

「けど？」

仮に後悔はないとしても、思い出されることはあった。

アヤノが一人でひらいていた食堂は東京の北のはずれにあって、最初のうちは近くの工場で働く男たちが昼となく夜となく食べにきてくれたので、申し分なく繁盛していた。しかし、ほどなくして工場が閉鎖され、ごっそり客がいなくなつて、そのうち、立ちゆかなくなつた。

そんなとき、アヤノが唯一、食堂をつづけていこうと頼りにしていたのが田代たしろという男だった。

下の名前は知らない。いつでも髪が乱れていて、一年中、同じような服を着ている。無精髭がしようにひげは生え



ているし、眼鏡のレンズのはしに亀裂が入ったままだった。

(このひと、お金がないんだろうな)

注文するのは、決まってハムエッグ定食だった。アヤノの食堂でいちばん安く、それでいてバランスよく肉と卵と野菜をとれる。

「僕の体はこのハムエッグ定食で出来ているんです」

田代は子供のような笑顔が印象的だった。普段の生活や胸のうちは判らないが、食堂でアヤノと話すときは屈託なく優しい目をしている。

魅ひかれるものがあった。

母性本能をくすぐられるとはこのことだろうか。こういう人と一生を共にするのは、何か自分の性に合っているような気がする――。

学生時代から仲のいいハルカに相談した。

「それはそうなんじゃない？」とハルカは事もなげに云った。「食堂をやってみたいっていう気持ちもね、アヤノの場合、根っこにそれがあるんじゃない？」

「それって？」

「お母さんみたいなさ——」

「え？ わたしが？」

「自分で気づいてないだけだよ。だって、わたしにはそんな気持ち、まったくもないもん。自分ひとりの食事をつくるのも面倒なのよ？　ほんと、尊敬しちゃう。誰にでも食事をつくってあげるなんて。町のお母さんでしょう、それ」

そうなんだろうか、とアヤノはいまでも自問していた。

答えは見つかからないが、代わりに（もし）と思うことはある。

（もし、あのとき、あのひと——）

あるいは、もう少し食堂をつづけていたら、どうなっていたか判らない。ただ、あのひとはアヤノが店をたたむ数ヶ月前から食堂に来なくなっていた。ある日を境に何の挨拶もなしに姿を見せなくなり、近所に住んでいるらしいことは知っていたから、きつと引越しをしたか、もしくは、別にもっといい食堂を見つけたのだろう。

そう思うと、

(儂<sup>はかな</sup>いものだな)

と胸の真ん中がしんとなった。

冗談なのか本気なのか自分でも判らなかつたが、  
かりそめにも「一生を共にしたらどうなるだろう」と考えた相手が、突然いなくなってしまう。  
それまで、毎日、顔を見ていたのに、ある日ふと、  
つながりが途絶えてしまう。

店をつづけてゆくというのは、こういうことなんだとアヤノは思い知った。人は気まぐれな生きもので、つながりなんてものは常に儂く、だから期待なんてしてはいけない、さらりとあきらめることが、この街を生きてゆくには肝要なのだ。胸に刻むようになった。

けど――。

「ん？」とキサが顔を上げ、食堂に入ってきた客の顔を見るなり、「あら？」と声をあげた。他の三人に「え？」「あれ？」「ふうん」と連鎖し、キサが、

「いらっしやい」

と客に——松井と可奈子に威勢よく声をかけた。四人の女たちは思わず時計を見たが、たしかに松井が来てもおかしくない時刻ではある。ただ、二人連れで、しかも相手が女性となると、（これは只事ただごとではない）と心愉たのしくなってきた。仕込みが忙しくて、客の動向など二の次という態度を装い、耳だけを二人が座ったテーブル席に向けて、それとなく二人の声を聞きとった。

\*

「じつは、ここへお客さまをお連れするのは、はじめでなんです」

松井がそう云うと、

「え、そうなんですか」

可奈子はヨリエが置いていったほうじ茶を飲みかけて手をとめた。

「はい。ここは、とっておきです。でも、冬木さんが——」

「あ、可奈子でいいです。みんな、そう呼んでま

すから」

可奈子にはこういうところがあつた。誰とでもすぐ仲良くなり、五分と経<sup>た</sup>たないうちに長年の知り合いであるかのように気安く振る舞う。その気安さが相手にも伝染して、相手もすぐに心を開く。いまの仕事をするようになって自然と身についたことか、それとも、もともとそういう資質があつたのか——たぶん、両方だろう。

松井にしてみれば、びわ酒をいただいた夜もそうだったと思ひ出された。それにしても、いきなり「可奈子でいいです」と云われて面食らつたが、松井にしてもこうした客とのやりとりはお手のもので、こういう場合は相手の要望にお応え<sup>こた</sup>するので、セオリーであると長年の経験から心得ていた。

「はい」と松井は、ほうじ茶をぐいと飲み、「その——可奈子さんから電話をいただく前から、今日はこの店で食事をしようと決めていたんです」  
「そうなんです。ああ、よかつた、わたし。ちようによくお腹<sup>なか</sup>がすいちゃつて」

「いや、じつを云うと、それは私のセリフでして。

今日はもう終わりにして、さっさと食事に行こう  
って、そういうモードになっていたもんですから

——」

「すみません。そんなときにお呼びたてして」

「いえ、これが私の仕事ですから。それはいいんですけれど、一旦、空腹に火がついたら——あ、空腹に火がつくとは云わないか」

カウンターの四人の女が、いっせいに下を向いて笑いをこらえた。(松井さんらしい)(松井さんはいつもそう)(言葉の使い方がいかにも独特で)(独特すぎておかしなことを云ったりする)

テーブルのメニュー表を眺め、松井は迷わず定番である〈B定食〉を注文し、可奈子は「うーん、迷っちゃうなあ」と悩み抜いたあげく、

「ハムエッグ定食」

注文をとりに来たヨリエに笑顔で伝えた。

ヨリエはカウンターに戻ると、

「ねえ、あのひと、よく見るとものすごく美人。すごくいい匂いにおがしてるし」

すかさず報告し、それを聞いたキサとフミナは、

「これは松井さん、惚れちゃったか」

「そうですよ、きつと」

「なんとなく、デレデレしてるもん」

こそこそと囁き合った。

アヤノだけが「ハムエッグ定食」という注文に因縁めいたものを感じ、「よりにもよって」と誰にも聞こえないようにつぶやいて、なおさら耳をそば立てた。「で、さっきの話ですけどね」と松井の声が少しひそめられたからだった。

「はい、探偵さんの——」

可奈子は食堂まで来る車中で聞いた話を反芻した。

ちやうど予約のお客さんにふられてしまったところで、「そのお客さん、どうやら本当に探偵らしくて、名探偵シュロってご存知ですか」——松井にそう訊かれて、「いえ、知りません」と可奈子は首を横に振った。しかし、本人をモデルにした小説が「映画にもなっているそうです」と聞き、「ああ、あの名探偵シュロですか」と急に思い出した。

先週の休日に新宿のシネコンで新作映画をハシゴし、宣伝の予告編の中に「名探偵シユロ・シリーズ、来春公開」とあったのがよみがえった。予告編とはいっても、ほとんど映像はなく、「数々の迷宮入り事件を解決」とか「胸のすくような名推理」「度重なる冒険」「乞うご期待！」といった言葉が仰々しい音楽と一緒に流れただけだった。

「だから、少なくとも映画は存在してますね」  
可奈子はほうじ茶を飲んで、「美味しい」と目を細めた。

「そうですか、映画は本当なんですね」

松井は自分の顎のあたりを指先で撫でた。髭が濃くなっている。じきに朝だ。食堂の外が少しずつ青みを帯びて行くのがガラス戸ごしにうかがえた――。

「じゃあ、あのひと、本当に名探偵だったのか」  
「貴重な経験でしたね」と可奈子も松井につられるように食堂の外を眺めた。

二人が急に静かになったので、四人の女たちも料理の手をとめて様子確かめた。なにやら妙に



しんみりとした感じで外を見ている。四人もまた、なんとなく外を見た。

夜の終わりの、東京がいちばん静かになるひとときだ。

「あ」と可奈子が思い出したように沈黙を破った。「ちよつと待ってください。そのひと、名探偵というからには、どんな難問でも解決してくれるんですよね」

「たぶん、そうなんでしょうね」と松井はよく判らなかつたが、「なにしろ映画になるくらいですから」と付け加えた。

「ですよね。予告編でもそんなこと謳うたってたし」「なにか、解決してほしいことでもあるんですか」

「解決というか——探している人がいて。弟なんですけど」

松井は（あれ？）と微妙かすかに首をかしげた。びわ酒をふるまわれたとき、そのお酒はもともと弟さんがつくっていたものと説明があり、話をしながら可奈子さんは食器棚の隅に置かれた写真立てを

見ていた。そこには彼女によく似た青年の写真が飾られていて、話の流れから、弟さんは若くして亡くなったのだらうと勝手に思っていた。

「行方ゆくえが判らなくなってしまうて——」

「そうですか」と松井はそこで言葉を切り、少し考えてから「私も」とおそるおそる云ってみた。

「松井さんも？」

「ええ。私もね、探している人がいないこともなくて」

「そうですか。じゃあ、こうなったら一緒に探してもらいませんか？ これも何かの縁ですよ。探してほしい人がいる運転手さんが、たまたま名探偵をお客さんとして乗せて、そのあとちよつとふられてしまったけど、代わりに乗ったわたしもまた探してほしい人がいるんですから。これはきつと神様の粋いきなはからいで、二人とも、その名探偵に依頼してみろつていうメッセージなんですよ」

可奈子はこんなふうになつとしたエピソードから答えを見出すのが得意だった。これにははつきりと自覚もあり、その自覚が「相談室のオペレ

「ター」という仕事に結びついたのは間違いない。「たぶん」と可奈子はいつもの調子で話しつづけた。「たぶん、映画になるほどの名だたる探偵ですから、依頼人も後を絶たないでしょう。行列ができているはずです。それに、人を探してほしいなんて、そんな簡単なことは請け負っていないじゃないですか？ でも、松井さんはそんな名探偵の話聞いてあげたわけですよ。ちょうど、お父さんが主演した映画を観みに行くところだった——でしたよね？ そんなプライベートなことまで話したのは、何か松井さんに感じるところがあつたんじゃないですか？ それなら、もしかして特別に請け負ってくれるかもしれません」

「ああ」と松井は可奈子の話を遮るように手をあげ、「でも」と首を横に振った。「連絡先が判りません。私は彼に名刺を渡しましたが、彼からはもらっていないので——」

「じゃあ、何か手がかりになるようなことは云ってませんでした？ なんでもいいんです。そもそも、シュロっていうのは本名なんでしょうか。上

の名前なのか下の名前なのか——何か他に名前を云ってませんでしたか？」

「そういえば」と松井は探偵がアパートを転々とした話を思い出し、「彼は引越し魔で、探偵になる前は手品師をやっていたと云ってました」

おかしな話である。二人は探偵に人探しを依頼したかったのに、いつのまにか、探偵その人を探すべく知恵を出し合っていた。

「そうだ。そのころの名前を云ってましたよ。マイティ田代とか——」

そのとき、食堂全体にかん高い衝撃音が響き、松井も可奈子も食堂の女たちも、はっと息を呑んで、音のした方に視線を移した。

アヤノだった。

足もとに割れた白い皿が飛び散り、あわててのばした指先が鋭利な破片に触れて、赤いものが滲にじんでいた。